

流麗な文章が生み出す、

豪奢にして繊細な作品世界

これぞ文学の中の文学。

読むほどに、また格別の面白さ！

# 谷崎潤一郎全集

決定版  
全26巻

中央公論新社 創業一三〇周年記念出版

全巻完結

中央公論新社



TANIZAKI  
1886-1965

## 刊行ご挨拶

明治・大正・昭和の半世紀にわたり、常に進化しながら、膨大な数の作品を書き続けた、まさに「文豪」の名にふさわしい作家、谷崎潤一郎。人間存在そのものに肉迫した傑作の数々は、没後五十年を過ぎた今なお、日本のみならず海外でも高く評価されています。

谷崎の生まれた一八八六年（明治十九）は、くしくも小社創業の年でもあり、二十五歳のときの「秘密」をはじめ、「吉野葛」「盲目物語」「春琴抄」「細雪」「鍵」、晩年の「瘋癲老人日記」等、代表作の多くが雑誌『中央公論』『婦人公論』に発表されるなど、非常に強い関係を保ち続けました。

谷崎生誕一三〇周年と中央公論創業一三〇周年を記念して、その豊かな世界を網羅した、決定版「谷崎潤一郎全集」をお届けします。

中央公論新社

## 決定版全集の編集にあたって

谷崎潤一郎が没して早五〇年。この五〇年間に文学をめぐる環境は大きく変わったが、人間の生に根差した本源的なものをさぐり、それを魅惑的な物語に結晶させた谷崎文学は時代を超えて読み継がれてきた。時代は活字の文化からITのデジタル文化へ移行したが、私たちが生きるうえに必要な物語の力を涸渇させてしまってはならない。二〇世紀の日本文学において絢爛たる作品世界を構築し、馥郁たる物語性を発揮した谷崎は「大谷崎」と称され、半世紀にわたり第一線で活躍しつづけたその作家活動からは数多くの名作が生み出された。

今回の決定版「谷崎潤一郎全集」は、新たなコンセプトによって編成しなおし、使いやすく、読みやすくなるようにさまざまな配慮を施した。収録する作品の配列は、基本として作者の最終完成形を示す単行本の形式を復元させ、それに編年体の方式を加味した。また谷崎文学の研究者の力を結集し、これまでの谷崎全集にはなかった「解題」をはじめて付し、初出紙誌、初刊本などいくつかの本文を校合して、主なヴァリアントを記載した。「細雪」など原稿が現存しているものに関しては、原稿とも校合した。

決定版の名にふさわしいように、谷崎潤一郎の文学的な業績を網羅したばかりか、ご遺族の協力のもと創作ノートや日記、メモの類にいたるまで豊富な新資料を収めた。旺盛なる谷崎の創作の秘密を私たち読者に開示する、今後の谷崎研究には必須の全集である。ここから新たな谷崎文学の魅力も発掘し得るものと確信する。

編集委員 千葉俊二

明里千章

細江 光

奥  
川上弘美



最初に読んだ谷崎の文章は、『陰翳礼讃』だった。それまで、大谷崎、というような言葉に怖じ気づいて遠ざけていたのが、すつ飛んだ。言葉は平易で、なにかも読み易いの、最後までわかるということがない。わかるのだけれど、自分がわかっていることの奥にまだ何かがあるような心地なのだ。その心地が、たいそう快い。驚いて、続けていくつかの小説を読んだ。それぞれに異なり、けれどそれぞれに谷崎だった。谷崎の小説は、谷崎だ、

と表現するしかないような気がする。ほかに、似たものを読んだことがない。さっぱりしているのに、芳醇。怖いのに、わくわくする。そして、ゼンたいにおいしそう。食べものが描かれているところでもなく、なんだかおいしそう。おいしそう、は、官能的、という言葉にも置きかえられるけれど、官能、という言葉では足りない気もする。そういうふううに色々感じながら読み終えると、またひとつたび読みたくなる。それが谷崎というものなのだ。

谷崎礼讚  
筒井康隆



「春琴抄」や「蘆刈」のように作者の見聞や記録の記述で読者におやこれはノンフィクションかと思わせながら徐徐に物語の核心へと導く手法と、マゾヒズムに近い自己犠牲。「丑（まんじ）」のように思わず笑い出してしまう途方もない饒舌。また谷崎自身が封建的ロマンへの憧れを抱きながら一方ではそこから脱出しようとする対創作的的心情が「蓼喰う虫」では主人公に投影されていたりする。かと思えば谷崎のユーモア感覚炸裂の「武州公秘

話」における鼻が落ちた織部正の話し言葉に抱腹絶倒。「鍵」や「瘋癲老人日記」の老人性欲は若い時に読んでも早く老人になるほど蠱惑的だ。「痴人の愛」や「丑」の痴呆にまで至る情愛の強烈さ。古きよき時代の東京をたっぷりと賞翫できる「幼少時代」。滋味横溢の「陰翳礼讃」。その他すべての作品に及ぶ展開の妙。やはり谷崎は実に面白い。しかしまだ半分も読んでいないのだ。この全集で残りを読破したいものである。

帯をキュウキュウ  
水村美苗



優れた芸術家は、その人にしか造り得ない固有の世界を造り、人類への贈物とし、土に還る。谷崎潤一郎がいなかったら、北斎やヘンデルがいなかったのと同様である。そこまで人に言い切らせる谷崎も幸せなら、その谷崎を原文で読める我々も幸せである。

小さい頃から谷崎が好きで、いづれ全作品を読みたいと思っていた。やがて異国の大学町で暮らすうちに、そんなことをしたら、日本に飛んで帰り、紅白粉をぬり、帯をキュウキュウと鳴らし、やれ

音楽会だ、花見だと人生を謳歌したいという、実現不可能な衝動にかられるだろうと思ひ、谷崎は避けるようになった。それが二十代の半ばを過ぎた頃である。意を決して全集を手にとれば、そのようなことはなかった。ひたすら読む毎日だった。一卷から順繰りに読んでせいであらう。かくもめまぐるしく変化していった谷崎の世界が、これまた、どこまでも谷崎固有のものである事実が驚かされた。さらに充実した全集が出るのは人類への新たな贈物である。



を注ぐ 序言〔藤原寅雄「炎外八篇」\* ほか〕

### 第十卷 月報 江國香織・原研哉

アエ・マリア〔アエ・マリア〕 肉塊〔肉塊〕 無明と愛染  
〔無明と愛染 腕角力〕 単行本未収作品・雑纂〔蛇性の  
姪 或る顔の印象 雛祭の夜 世界は書籍なり〔翻訳〕  
妹 名妓の持つ眼 ほか〕

### 第十一卷 月報 瀬戸内寂聴・山田詠美

神と人との間〔神と人との間〕 痴人の愛〔痴人の愛〕  
雑纂〔上方の食ひもの 洋食の話 予告と申訳 「遊ばせ  
言葉」を廃止すべし\* 瀧田君の思ひ出 ほか〕

### 第十二卷 月報 有栖川有栖・保坂和志

潤一郎喜劇集〔金を借りに来た男〕 赤い屋根〔蘿洞先生  
馬の糞 赤い屋根 友田と松永の話 二月堂の夕 港  
の人々 マンドリンを弾く男 白日夢〕 近代情痴集〔新  
潮文庫・第八編〕〔青い花 続蘿洞先生〕 饒舌録〔饒舌録  
「九月一日」前後のこと 阪神見聞録 上海交遊記 上  
海見聞録 グリープ家のバアラの話〔翻訳〕〕 単行本  
未収作品・雑纂〔為介の話 一と房の髪 都市情景 栗  
原トーマス君のこと うめとさくら\* ほか〕

### 第十三卷 月報 多和田葉子・町田康

潤一郎犯罪小説集〔日本に於けるクリップン事件 或る  
罪の動機 黒白〕 卍〔まんじ〕〔卍〔まんじ〕〕 雑纂〔関  
西文学の為に 猫を飼ふまで\* 芥川君の計を聞いて\*  
彼は如才がない\* ほか〕 参考〔卍〔まんじ〕〕〔改造〕  
掲載初出文\*〕

### 第十四卷 月報 小池真理子・松家仁之

日本探偵小説全集 第五篇 谷崎潤一郎集〔青塚氏の話〕  
蓼喰ふ虫〔蓼喰ふ虫〕 単行本未収作品・雑纂〔顕現 ド  
リス カストロの尼〔翻訳〕 三人法師 藝術の一種とし  
て見たる殺人に就いて〔翻訳〕\* 現代婦人の服装\* 食  
味漫談\* 酢豆腐の一件\* 岡本にて 関西の女を語る  
カフェー対お茶屋 女給対藝者 料理の古典趣味 ほか〕

### 第十五卷 月報 恩田陸・堀江敏幸

乱菊物語〔乱菊物語〕 盲目物語〔盲目物語 吉野葛 紀

伊国狐憑<sup>キ</sup>漆掻<sup>キ</sup>語 覚海上人天狗になる事〕 雑纂〔春寒  
大衆文学の流行について 離婚挨拶 鳥取行き 倚松  
庵詠草〔スバル〕\* ほか〕

### 第十六卷 月報 朝吹真理子・池澤夏樹

武州公秘話〔武州公秘話〕 倚松庵隨筆〔懶惰の説 恋愛  
及び色情 現代口語文の欠点について 「つゆのあとさ  
き」を読む 私の姓のこと 私の見た大阪及び大阪人  
佐藤春夫に与へて過去半生を語る書〕 青春物語〔青春物  
語 藝談〕 雑纂〔正宗白鳥氏の批評を読んで 倚松庵詠  
草〔未発表原稿〕\* むかしばなし\* 新聞小説を書いた  
経験\* ほか〕

### 第十七卷 月報 小川洋子・泉奥光

蘆刈〔潤一郎自筆本〕〔蘆刈〕 春琴抄〔春琴抄 顔世〕  
撰陽隨筆〔陰翳礼讃 春琴抄後語 装釘漫談 文房具漫  
談 直木君の歴史小説について 東京をおもふ 私の貧  
乏物語 大阪の藝人 半袖ものがたり〕 鶉鴉籠雑纂〔廁  
のいろく 旅のいろく〕 単行本未収作品・雑纂〔菲  
崎氏の口よりシユパイヘル・シユタインが飛び出す話  
夏菊 岡田時彦弔辞 文運の進歩\* 言葉\* ほか〕

### 第十八卷 月報 青山七恵・ドナルド・キーン

文章読本〔文章読本〕 聞書抄〔聞書抄 第二盲目物語〕 猫  
と庄造と二人のをんな〔猫と庄造と二人のをんな〕 初昔  
きのふけふ〔初昔 きのふけふ〕 単行本未収作品・雑  
纂〔木影の露の記\* 身辺雑事\* おぼんざい\* 潤一郎  
六部集について\* 田舎料理\* 自由劇場の再挙に際して\*  
ほか〕

### 第十九卷 月報 高橋源一郎・水村美苗

細雪〔細雪 上巻 細雪 中巻〕 雑纂〔源氏物語の現代語  
訳について 二つの意味に於て\* シンガポール陥落に  
際して 莫妄想 追憶二二三\* ほか〕

### 第二十卷 月報 阿部和重・中島京子

細雪〔細雪 下巻〕 磯田多佳女のこと〔磯田多佳女のこ  
と〕 都わすれの記〔都わすれの記〕 月と狂言師〔梅田  
書房版〕〔月と狂言師〕 月と狂言師〔中央公論社版〕〔雪

所謂痴呆の藝術について 同窓の人々「潺湲亭」のこと  
その他の 客ざらひ 疎閑日記 雑纂〔露伴翁追悼講演  
会に寄す 私の対談について\* 〔細雪〕回顧 ほか〕

## 第二十一卷

月報 酒井順子・辻原登

京の夢大阪の夢〔京洛その折々〕 少将滋幹の母〔少将滋  
幹の母〕 少将滋幹の母 乳野物語〔乳野物語〕 幼少時代  
〔幼少時代〕 雑纂〔安倍能成氏への書翰 嶋中雄作弔詞  
「人の和」の勝利\* 春團治のことその他 ほととぎす\*  
老いのくりこと ほか〕

## 第二十二卷

月報 窪美澄・柴崎友香

過酸化マンガン水の夢〔過酸化マンガン水の夢 A夫人  
の手紙 小野篁妹に恋する事 上山草人のこと 或る時〕  
歌々板画巻〔歌々板画巻\*〕 鍵〔鍵〕 夢の浮橋〔夢の浮  
橋 親不孝の思ひ出 高血圧症の思ひ出 四月の日記  
文壇昔ばなし〕 雑纂〔京都に寄す\* ほか〕 参考〔夢  
の浮橋〔草稿〕\* 女中綺譚〔台所太平記〕草稿〕\*

## 第二十三卷

月報 荻部直・森博嗣

三つの場合〔三つの場合 吉井勇翁枕花 若き日の和辻  
哲郎 古川緑波の夢 伊豆山放談 幼少時代の食べ物の  
思ひ出 日本料理の出し方について おふくろ、お関、  
春の雪 親父の話 或る日の問答 千萬子抄〕 当世鹿も  
どき〔当世鹿もどき〕 単行本未収作品・雑纂〔老後の春

残虐記 明治回顧 審査員の言葉\* 私と国歌大観  
ふるさと 気になること ほか〕

## 第二十四卷

月報 篠田節子・島田雅彦

瘋癲老人日記〔瘋癲老人日記〕 台所太平記〔台所太平記〕  
雪後庵夜話〔雪後庵夜話 京羽二重 京都を想ふ 四季  
女優さんと私 わが小説——「夢の浮橋」「越前竹人形」  
を読む 撫山翁しのぶ草〕の巻尾に〔笹沼源之助追悼〕  
野崎詣り〔池崎忠孝回想〕 おしやべり にくまれ口  
七十九歳の春〕 雑纂〔千萬子からの雪だより 自分の好  
きな作品を\* 吉井勇全集序\* ほか〕

## 第二十五卷

月報 伊藤比呂美・平野啓一郎

初期文章〔狎の葬式 うろおぼえ 死火山 ほか〕 談話  
筆記 創作ノート〔松の木影\* 続松の木影\* 潺湲亭\*  
子\* 丑\* 武州公秘話ノート\* シングレランノート\*  
七十九の春ノート\* 覚醒剤に関する筆記\* 幼少時代メ  
モ\* 絶筆メモ\*〕 歌稿〔ありのすさひ\* 松廼舎集\*  
歌集〔初昔きのふけふ〕\*〕

## 第二十六卷

月報 川上弘美・筒井康隆

日記〔一〇八〕〔昭和33年7月11日〜38年2月4日〕\*  
記事\* 年譜 著作目録 著書目録 索引

〔太字は単行本タイトル、\*は全集初収載作品です〕

## 編集委員

千葉俊二

〔早稲田大学教授〕

明里千章

〔千里金蘭大学教授〕

細江光

〔甲南女子大学名誉教授〕



## ●—新発見資料の白眉！ 幻の創作ノート「松の木影」

本全集に初めて収載される作品は実に150点に及び、傑作誕生の秘密に迫る創作ノート11点も一挙に公開される（第25巻所収）。中でも注目すべきは、戦災で焼失したと考えられていた最初の創作ノート「松の木影」。「春琴抄」「陰翳礼讃」「聞書抄—第二盲目物語」「猫と庄造と二人のをんな」「細雪」等の作品執筆に際してのネタ帳とも言える詳細なメモで、昭和8（1933）年2月から昭和13（1938）年半ばにかけてのものと推測される。いくつかの作品の構想が同時並行的にさまざまに試行錯誤され、作家周辺の人々に関するエピソードも大量に書き留められている。谷崎文学の一つのピークをなす「春琴抄」執筆以後、新たな傑作を生み出すための模索を続け、やがて「細雪」に結実していく過程も生々しくうかがうことができる。この「松の木影」の存在が明らかになるや、文学史的な事件であり質的にも量的にも戦後最大級の発見と、テレビや新聞で大きく報じられた。



● 約16×23センチの大きさの印画紙に焼きつけられた状態で見つかった「松の木影」は全255枚。戦争中、空襲などで焼失してしまうことを危惧した谷崎が、ノートを撮影したものを友人に預けたと推測される。

## ●—「日記」「記事」から浮かび上がる、日常と素顔

創作ノートと並ぶ注目資料が第26巻所収の「日記」。「私は思ふところがあつて古い日記帳を悉く焼き捨ててしまったので……」（「菅楯彦氏の思ひ出」）と書いた谷崎だが、昭和33年7月から38年2月の日記帳8冊が残されていた。高血圧や右手の痛みにも苦しみながらも、創作意欲は衰えを知らず、「原稿四枚半進行。牽引十五分づつ一日二回」（昭和34年7月27日）と執筆を重ねる晩年の日常が克明に綴られる。

同巻には、「文壇の彗星潤一郎」（明治44年）、「谷崎潤一郎氏夫人 佐藤春夫氏と結婚」（昭和5年）、「ノーベル文学賞候補といわれて……」（昭和37年）など、新聞や雑誌のインタビュー記事62本も収載。デビューから晩年まで、作品からは読み取れない作家の素顔がうかがえる。





◎四六判上製・函入り  
 ◎装幀 ミルキイ・イソベ  
 ◎装画 山本タカト

## ● 本全集の特色

◎**充実の解題**……本文が確定するまでの改稿・改訂の経緯など、最新の研究成果を盛り込んだ解題を各巻に付す。発表当時の創作意識にも迫ることができるように、初出紙誌、初刊本などいくつかの本文を校合して、主なヴァリエーションを記載。「細雪」など原稿が現存しているものに関しては、原稿とも校合した。

◎**編年編集で業績を一望**……デビュー作「刺青」から、晩年の「瘋癲老人日記」、絶筆「七十九歳の春」にいたるまで、すべての作品（『源氏物語』現代語訳を除く）を、単行本ごと、執筆時期ごとにとまとめる。また、同時期に書かれた随筆、短文も同じ巻に収載し、作風の変遷や創作の背景を明らかにする。

◎**新資料を満載**……全集未収の創作ノート全11点、新たに発見された晩年の日記8冊など、創作と生活の秘密に迫る貴重な新資料をはじめとして、初収載の作品は150点以上。

◎**新字旧かな**……著者の意向を尊重しながら、現代の読者にも読みやすい本文とするため、新字旧かなを採用。

◎**豪華執筆陣によるエッセイ掲載の月報付き**

中央公論新社 営業局 〒100-8152 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL:03-5299-1730 FAX:03-5299-1946

申込書 帳合・貴店印	<h1 style="color: red;">谷崎潤一郎全集</h1> 〈決定版・全26巻〉	
	◎各巻定価 本体 6,800円(税別) ◎全26巻定価 本体 176,800円(税別)	
	<input type="checkbox"/> 全26巻お申し込み	<input type="checkbox"/> ご希望巻のみお申し込み <small>※巻数をご記入ください</small>
お申し込み日 年 月 日		ご担当 様
お名前		お電話番号
※お客様の個人情報・お電話番号などの個人情報は、本企画以外には使用しません		